

多摩川にさらす手作り

南 寿宏

万葉集で多摩川を素材にした歌は2首。今回はその2首の歌を紹介する。

1 租庸調

701年の大宝律令で、租庸調の税制度が発令された。

租・・・口分田で収穫した米の3%

庸・・・10日もしくは20日の労役

調・・・地域の特産品の物納 調として布を納めていたのが調布の名の由来

万葉集の東歌に、調とする布に関する歌があるので、紹介する。

多麻河伯介	左良須豆久利	佐良左良介	奈仁曾許能兒乃	己許太可奈之伎	
多摩川に	さらす手作り	さらさらに	なにそこの兒の	ここだ愛しき	
たまがはに	さらすてづくり	さらさらに	なにそこのこの	ここだかなしき	万葉集 卷十四 3373
多摩川で	手織りの布をさらす	さらにさらに	何でこの子が	こんなに可愛いのか	作者未詳
The pretty girl rinses cloth in the Tama River more and more. Why does she seem so sweet and cute?					マクミラン訳
豆知識 調として布を納めていたのが調布の名の由来である。手織りの布は、多摩川の清い流れに曝された。					

2 防人(さきもり)の歌

663年、唐・新羅連合軍に白村江で敗北した天智天皇は、敵軍の侵攻を恐れ、いくつかの防衛策を講じた。

① 日本海沿岸に兵(この兵が防人)を駐留させ、敵軍の上陸を阻止する。

② 太宰府防衛のため、水城(みずき)を造り、防御する。

③ 対馬～瀬戸内海沿岸に、屋島城等の朝鮮式山城を造り、敵軍の進軍に備える。

④ 大和飛鳥から近江大津に遷都し、都陥落の危機には琵琶湖から船で、東国に逃れる。

丈部稲麻呂(はせつかべのいなまろ)は駿河の国の住人。歌に父母が出てくることから、独身か？

知と波と我	可之良加伎奈弓	佐久安例弓	伊比之氣等婆是	和須礼加祢豆流	
父母が	頭搔き撫で	幸くあれて	言ひし言葉ぜ	忘れかねつる	
ちちははが	かしらかきなで	さくあれて	いひしけとばぜ	わすれかねつる	万葉集 卷二十 4346
父さん母さんが	頭をかきなでて	無事でいろよと	言った言葉が	忘れられない	丈部稲麻呂
豆知識 『さくあれて』は『さきくあれと』の、『けとばぜ』は『ことばぞ』の駿河訛り。ぞ(ぜ)+連体形は係り結び。					

3 多摩の横山

武蔵の国の住人で防人に徴用された者は、武蔵国府(現・東京都府中市、府中本町駅付近)に集合し、防人担当の役人である防人部領使(さきもりことりづかい)の引率で現・東京都町田市、現・神奈川県大和市を経て難波に向かった。武蔵国豊島郡(現東京都豊島区およびその周辺)に住む宇遅部黒女(うちべのくろめ)の夫もその防人の一人である。

国府を出発後、馬に乗る防人もいるが、黒女の夫は馬がない。「ああ、馬があれば」と、黒女は嘆く。夫はここからずっと、難波津まで歩いて行くのだ。

防人たちは、出発のときに歌を詠む。黒女は目の前に低く横たわる山を『多摩の横山』と詠んだ。夫も歌を詠んだ。

難波で防人検校の任に当たった大伴家持は、防人たちの歌を選別し、一定のレベルにある歌を万葉集巻二十に掲載した。黒女の歌は掲載されたが、夫の歌は拙劣歌として選ばれなかった。武蔵防人の歌は二十首作られ、うち十二首が万葉集に載っている。

阿加胡麻乎	夜麻努介波賀志	刀里加介弓	多麻能余許夜麻	加志由加也良牟	
赤駒を	山野に放し	取りかにて	多摩の横山	徒歩ゆか遣らむ	
あかこまを	やまのにはかし	とりかにて	たまのよこやま	かしゆかやらむ	万葉集 卷二十 4417
赤駒を	山野に放し飼いたが	捕まえ損ねた	夫は多摩の横山を	歩いていくのか	宇遅部黒女

① 稲城市説(下図赤色メッシュ)

② 多摩市説(下図赤色実線)

下図は、地質図に鉄道路線、よこやまの道および鎌倉街道を付記したものである。よこやまの道は、はるひ野駅の北から唐木田駅の西までの尾根筋に多摩市が整備したものである。



9